

熊本県西原村立河原小学校の実践学習と教職員との意見交換

日 時 2025年12月8日(月曜日)10:35~14:00

場 所 熊本県西原村立河原小学校 児童数 67名

1. 今村愛校長と教頭、松原郁子 教諭、竹下良一 前西原村教育長の協議

場 所 校長室

テーマ 河原小学校の地域の学びについて(主に生き物)の体系)、

総合の時間 30時間のうち、15時間を活用

(1)年次に応じて

教育課程の範囲内で、総合の時間を活用し、地域の方たちと連携して、地域の自然を体験し、それを根付かせることを目的としている。小学校の就学期間を通して100%を目指す。

三年生には、「萌の子塾」草原についての学び

四年生には、「河の子塾」川や池や滝についての学び

五年生には、「風の子塾」ウインドファーム(農場)についての学び

六年生には、「山の子塾」山についての学び

(2)三年から六年生を年次シャッフルして→テーマを設定、テーマ毎に、

3、4程度のグループに分けて

例えば、「人と人とのふれあい」「跡地の活用方法」「自然と環境」「希少種と外来種」「河原の魅力」等→去年のテーマは、「からいも」「河原の有名人」「河原の歴史」「環境」

※この取り組みには、河原小学校を卒業した高校生が生物部に入りボランティアで指導している。

2. 入門教材「ふるさとのたからもの」と探究教材「ふるさとのふしぎ」を活用して実践学習

対象児童 一年生 12名

担 任 松原郁子 教諭+地域ボランティア 2名

実践学習の概要

血の池地獄の赤い泥と鬼石坊主地獄の灰色の泥を活用した10.21

と 10.31 の2回の実践と別府の学びを踏まえた「別府の色」と

「河原の色」を使った「ふるさとの比べ学習」

①河原の色→がけの土と畑の土、河原の特産品サツマイモの皮の色

②別府の色→血の池地獄の赤い泥と鬼石坊主地獄の灰色の泥





3. 校長、教頭、担任、前西原村教育長との意見交換

①今村愛校長・教頭

これまでの河原小学校では、総合の時間 30 時間のうち 15 時間を使った「河原の学び」を、三年生以上を対象として行ってきたが、1 年生と 2 年生は対象としていなかった。

それは、1 年生と 2 年生を対象としても関心と学びが困難ではないかと考えたからである。

今回、「地域の色・自分の色」研究会の研究協力校を受けたのは、色という切り口であれば、1 年生

と2年生が関心と学びに入るのではないかと考えたからである。

そして、それは的中して、見ていただくとお判りいただけると思うが、一年生の子どもたちは、大変な関心を示しており、地域の学びに向かっている。

学校としては、「色を活用した地域の学び」を今後も継続していきたいと考えている。

つまり、1年生と2年生は、「色を活用した地域の学び」を入れて、3年生から6年生は、これまでの河原小学校で積み上げた「年次別とグループ別の地域の学び」という仕組みにし、6年間の「地域の学び」を行いたい。

その仕上げとなる6年生時には、山間で育った子どもたちに、ジャムステックの田代氏の「深海の不思議」を聞かせ、海という広い世界を学ばせたいと考えている。

是非、ジャムステックの特別授業を河原小学校に入れていただきたい。

→来年度一学期に、オンライン特別授業を持つ。学校と研究会とで、田代氏の日程を調整する。

②松原郁子担任

子どもたちは、色という視点を入れることにより物事を深く見ることができるようになった。

加えて、実践を通じて色の違いや変化という視点の面白さも感じている。

例えば、朝顔の汁や紫芋の皮の汁にレモン汁を入れた時に色が青から赤に変化することをとても興味を持ったようだ。

③地域のボランティア支援員

私は、このクラスに在籍している児童の母親です。定期的にボランティア支援員として、授業を手伝っています。他にも、ボランティア支援員がいて、交代しながらクラスの特別授業を支援しています。

④竹下良一前西原村教育長

(河原小学校の地域の学びの仕組みづくりは、竹下前西原村教育長の在任期間に始まった。)

・本日は、実践授業の様子と、校長、教頭、松原先生、地域ボランティア支援員の人々の生の話を聞いてもらいたいと思った。

・地域ぐるみ、学校ぐるみで地域の学びを行っている。

・色をテーマにした地域の学びには子どもの興味が最後まで尽きることがなかったことは、この題材の奥深さを物語っている。

・「色」を出発として自然を観ることが、そこにある事実（柔らかな土においしい芋が育まれること）へつながっていく。このような学びがモノを見ていく本物の目を育てるのだと思う。

・人、もの、ことの結びつきが一の絵の中に納まった教材が必要だと思った。